

学校を ICT で繋ぐ！生徒主体の「ICT 委員会」の設置

清泉女学院中学高等学校 教諭 嶋崎 陽一，教諭 小野 浩司

キーワード：委員会活動，生徒主体，課題解決能力

実践の概要

校内における生徒の ICT 利活用の啓蒙活動を目的として、生徒主体の「ICT 委員会」を設置した。生徒発案の企画を通して、委員の ICT モラルと ICT リテラシーの向上に加え、生徒が現状課題を見つけ、ICT ツールを用いて仲間と共に協働して解決する力を育むことができた。

1. 目的・目標

本校では現在、中2から高2までの4学年が1人1台の Chromebook を所有している。ホームルームや授業、部活動など、学校生活の多くの場面で G Suite アプリを利用しており、ICT に興味を示す生徒が一定数いる一方で、急速な ICT 推進に対応できず、戸惑っている生徒も少なくない。今後さらに端末を所有する学年が増え、ICT の利用機会が増加するため、生徒の ICT モラルの向上に加え、生徒間の ICT リテラシー格差をなくすことは、ICT 推進における最重要課題である。また、授業や部活動での ICT の活用方法の検討は教員が主体であるが、生徒が学校生活を通して ICT に慣れ親しみ、より有効活用していくためには、教員だけでなく生徒自らが ICT の利活用について深く考え、実践する機会が必要である。

そこで本校では、生徒が主体となって ICT を推進する「ICT 委員会」を設置した。本委員会は、教員への情報（生徒のニーズ）提供と、生徒の ICT 利活用を牽引する存在として、教員と生徒を繋ぐ架け橋の役割を担い、教員と協働して学校の ICT 推進に携わるとともに、ICT の利活用を啓蒙することで全校生徒の ICT モラルと ICT リテラシーの向上を目指す。また、生徒主体で委員会活動を進めることで、生徒が自分たちで課題を見つけ、学年や立場を超えた仲間と共に ICT ツールを用いて課題を解決する力と態度を涵養できると考えている。

2. 実践内容

2.1 ICT 委員会の概要と運営

多くの学校で教員主導として ICT 導入・活用に向けた取り組みが進められる中で、本校の ICT 委員会は生徒が主体的に ICT 推進に関わる点で先進性がある。現在は、Chromebook を所有している学年のうち、中3から高2の生徒（各学年10名程度）が所属している。ICT 委員会は常任委員会ではなく、兼任できる委員会であるため、生徒会を運営する様々な委員会に属する生徒が参加でき、多角的な視点から ICT 推進に対する意見を提案・議論できる利点がある。現に生徒会役員、放送委員、福祉委員

など、様々な委員会に所属する生徒が ICT 委員会に参加している。

ICT 委員会では生徒主体で活動を進めるため、進行と企画立案は生徒が行い、教員はファシリテーターとして参加する。教員が課題を示すのではなく、生徒が校内の ICT 推進の現状を考える中で、自分たちで課題を見出し、それを解決するための新たな企画に自由に挑戦できる点も本委員会の特長である。現在は委員を縦割りで複数の班に分け、学年を超えて班ごとに企画したプロジェクトを進めている。委員全員が集まる会議を月に1、2度行っており、ここでは各班がプロジェクトの進捗状況を発表し、各班の意見交換の場としている。議事録は毎回 Google ドキュメントを共有し、交代制で記録する。委員会の事務連絡や情報共有は Google Classroom を使用し、委員会全体で情報を共有するためのクラスに加え、各班がプロジェクトを進めるために班ごとのクラスも開設した。新型コロナウイルス感染予防のための休校期間中も、このクラスを使い分け、Google Meet を利用して定期的にリモート会議を行い、活動を続けてきた。

2.2 活動内容

これまでに実践した、または実践中の活動内容は以下の(1)～(7)である。

- (1) Chromebook 使用アンケートの実施
- (2) Chromebook 使用マニュアルの作成
- (3) リンク集サイト「Student room」の作成
- (4) タイピングコンテストの主催
- (5) 習熟していない生徒や教員への ICT 機器の補助
- (6) デジタル教科書導入に向けた先行実践・活用調査
- (7) 小学生対象の学校説明会での公開授業の補助

以下では、生徒が企画立案した(1)～(4)の活動について詳細に紹介する。

(1) Chromebook 使用アンケートの実施

Chromebook を所持する学年を対象に、Chromebook の使い方に関する質問や要望、使用したいアプリ等を調査するアンケートを実施した。アンケートは Google Forms で作成し、Classroom で配信した。集まった回答を生徒が返答できる内容と教員が返答すべき内容に振り分け、集計結果とその返答についてドキュメントでまとめ、教員の ICT 推進グループに報告すると共に、(3)のリンク集サイト「Student room」を通して生徒へ返答 (Q&A) を配信している。この一連のサイクルを定期的に行う。

(2) Chromebook 使用マニュアルの作成

新たに Chromebook を持つ学年を対象に、Chromebook 使用マニュアルをドキュメントで作成した。マニュアルには、生徒が考えたルールや、G Suite アプリの説明、上級生が部活動や委員会実践している活用方法の紹介などを記載した。これらの内容は、すでに運用している学年に実施した Forms アンケートの結果と、委員たちの経験をもとに検討した。

(3) リンク集サイト「Student room」の作成

生徒が頻繁に使う Web アプリのリンクを集めたサイト「Student room」を Google サイトで作成した(写真1)。使用頻度の高いサイトを Forms で調査し、その結果をもとに Student room をデザインした。サイト上部のタブには(1)の Q&A や(2)のマニュアルに加え、中学生、高校生向けのページや年間予定表を実装した。



写真1 Student room

(4) タイピングコンテストの主催

ICT ツールに慣れ親しむことと、生徒全体のタイピング技術の向上を目的として行った。コンテストの宣伝は放送やポスター掲示などの従来の方法に加えて、Classroom での配信も行った(写真2)。コンテストには、e-typing の腕試しレベルチェック (<https://www.e-typing.ne.jp/>) を用いた。上位5名には景品としてオリジナルステッカーを配布した(写真3)。コンテストには様々な学年の生徒や教員が参加し、大いに盛り上がった。



写真2 ポスター



写真3 委員が作成したステッカーとコンテストの様子

3. 成果

ICT 委員会には、何事にも積極的でリーダーシップを発揮できる生徒から、普段はあまり目立たないが ICT が得意な生徒など、幅広いタイプの生徒が所属しているが、ICT への強い興味から、それぞれの生徒が意欲的に委員会に参加しており、生き生きと活動する姿が見られた。ICT 委員会は様々な生徒に活躍の場を提供でき、自己有用感と自己肯定感を養える委員会になると感じた。

企画書をドキュメントで作成して班員と共有する作業や、アンケートを Forms で作成して回答結果を班員や教員と共有する作業など、生徒は目的に応じてどのツールを使うべきかを適切に選択できるようになってきており、委員会活動を通して確実に ICT リテラシーが向上している。それぞれの生徒が委員会で得たノウハウを授業や部活動などでも活用することで、全校生徒の ICT リテラシーの向上への寄与が期待できる。

Chromebook 使用アンケートでは、学校で制限している SNS の制限解除を求める要望も散見されたが、それらの意見に対して、「学習で使用するものであり、SNS の開放は必要ない」と生徒の言葉で回答することができた。アンケート対応を通して、生徒の ICT モラルを生徒によって高めることができた。

タイピングコンテストでは、多くの教員が参加したことで、教員のスコアを目指して奮起する生徒が現れるなど、生徒のやる気を誘発すると共に、生徒と教員の絆が深まった。また、イベントを楽しく盛り上げたいという委員の思いから、入賞者へのステッカー贈与が実現したことも委員会の挑戦可能な土壌の成果と言える。さらに同様の成果として、マニュアル作成の立案が挙げられる。委員のほとんどは Chromebook 導入の 1 期生であるため、生徒も教員も手探りで活用方法を模索していた時期の失敗体験から課題を見出し、後輩たちにはスムーズに Chromebook を使いこなしてほしいという思いから立案された Chromebook 1 期生ならではの企画である。

上記の活動に加えて、生徒発案で「授業記録ノートの電子化」が実現した。本校では毎回の授業内容をノートに記録する伝統があるが、これをドキュメントに置き換えたことで、欠席した生徒がいつでも授業内容を確認できるようになった。生徒と教員が共に ICT 活用を考える場ができたことで、今後は教員と生徒が協働して活用方法を模索する風土の醸成が期待できる。

4. 今後に向けて

今年度より有志から委員会に昇格した本委員会であるが、10 月から更に新たなメンバーを迎えた。今後は現在の企画を継続的に運営しつつ、生徒発案のプロジェクト班をさらに増やし、生徒主体で活動できる環境を整備していく。ICT 利活用の啓蒙を進めるとともに、生徒が ICT ツールを駆使して仲間と協働して課題を解決することの楽しさを感じられるよう支援したい。

清泉女学院中学高等学校・嶋崎 陽一、小野 浩司